



『橄欖』にみる「愛のある知性」

小羽田誠治

はじめに

宮城学院女子大学では2021年度に、大学の教育理念を端的に表現するものとして、「愛のある知性を。」というタグラインが制定された。この言葉は、大学が直面する今日的な課題に対応した、どちらかと言えば未来志向の検討のもとに紡ぎ出されたものであるが、しかしながら、この言葉が指し示す内容自体は、大学のみならず宮城学院およびその前身たる宮城女学校における教育理念（の1つ）でもあったことは容易に想像される。

本稿では、そのタグラインに示されるどころの「愛のある知性」なるものが、かつての教育においてどのように実践されていたのかを、これを育むべき主体である生徒たちに焦点を当てて考察するものである。より具体的には、1921年に創刊し、生徒たちの学修成果や日々の思いを綴った雑誌『橄欖』のいくつかの作品を分析することで、そこ表現された「愛のある知性」を探り出し、これを宮城学院に通底する教育理念としてあらためて確認したい。

1. 「愛のある知性」とは

作品論を展開するに先立ち、そもそも「愛のある知性」とはどのようなものであるのか、検討しておく必要があるだろう。「愛のある知性」というからには、ある種の知性であるのは間違いないが、そこに冠される「愛のある」という形容の抽象度が高いため、より具体的にする必要があると思われるからである。

このタグライン「愛のある知性を。」には、ボディコピーと呼ばれる説明文が付されている。これは末光眞希学長によって作詞されたものであり、大学の思想を代表するものとして、まずもって参照するべきものである。以下にその全文を引用する。

急激に変化する世の中
これからどうなるのか
誰も答えを教えてくれない。

だからこそ、心に問いを持ちたい。
答えのない問いを問い続ける

勇気と知性を持ちたい。
明日を生きるのは私なのだから。

自分のことをもっと知りたい
あなたのことをもっと知りたい
私が問いを持つのは、
あなたと共に生きたいから。

問うことは関心
問うことは愛
それが私がここで見つけた
愛のある知性

このボディコピーに基づけば、「愛のある知性」とは以下のような知性であると言えるのではないだろうか。

- (1) 自ら問いを発し、正解のないものであっても諦めずに問い続ける知性。
- (2) 自分と他者を理解し、共生を求める知性。

また、宮城学院はキリスト教主義の学校であるから、「神」による愛、「神」に向かう愛も当然ながら含まれることになる。ただし、これらの愛を単に言葉のうえでそう表現しただけでなく、十分に内在化させた知性として発現されているものを汲み取っていくこととする。

元来、豊かな広がりを持つ「愛のある知性」という言葉を、あまり杓子定規に規定するのも憚られるが、本稿ではひとまず、このような性質の知性を軸として考察を進めていきたい。

2. 田中ちゑ「きまりきった話」

まず初めに、記念すべき第1号の巻頭を飾ることとなった論説から見ていきたい。高等女学科5年生の田中ちゑ（以下、田中）による論考である。タイトルは「きまりきった話」。これはどのような内容だろうか。

なぜこのようなタイトルがつけられたかは、冒頭で以下のように述べられている¹。

一體、くだらない人間にかぎつて、きまりきった事を考へるものでして、又同時にさう云ふ人達は、くだらない言葉に馬鹿に感心して居るものです、(中略) とにかく、

¹ 『橄欖』1 (1921年6月)、5頁。

下らない人間は、こんな位の事しか考へないものです。で私も、其の下らない人の例にもれず、きまりきった事しか考へて居りません。ですから、いざ演説なぞと云つた所で、おいそれと立派な思想が出て来るわけでもないのであります。で私はやつぱりきまりきった事を云はうと思ひます。それが私として、一番自然な事ですから。

しかし、一読すればわかるのだが、この「きまりきった話」と思しきものは、タイトルとわずか冒頭の1段落のみであり、このように述べた次の瞬間、田中は非常に思想性に富む芸術論を展開するのである。

田中は、芸術家が墮落していると言われていることについて、残念ながら肯定せざるを得ないと言う。当時は谷崎潤一郎らの耽美派文学が隆盛していた頃であり、おそらくはその思潮に対しての反発を示したものであろう。田中は自らの持つ芸術家像を以下のように語る²。

私の思ふ藝術家は、もつと高尚であり、もつと美しくあり、尊敬にあたひすべきものでなければなりません。藝術によつて向上されなければならなかつた彼等は、却つてそれによつて墮落してしまつたのであります。

そして、いかにも宮城女学校の生徒らしい精神と表現でもって、「彼等は神に捧げなければならなかつた藝術を、サタンにくれてしまつたのであります」と断罪するのである。

それでは、彼ら墮落した芸術家の作品はどのような点に問題があるというのだろうか。田中は、U氏という作家をとりあげ、その作品を以下のように評している³。

もちろん氏は筆もよくまわるでせう。うれ行のよい作家でせう。ずる分人としがつたものゝ見方もあるでせう。けれどそれが藝術としてどれだけのちがあるが。それは手品師の少しく上等なものと變りないではないでせうか。なぜと云ふに、氏には創作に對する誠意がありません。眞面目さがありません。

どの作家のどの作品のどの部分をこのように論じているのか、詳細はわからない。しかし、田中が何を「藝術」と考へているかは、はっきりと示されている。即ち、いかに文章が巧く、売れ行きが良く、あるいは独特の感性を備えていても、それは藝術というよりは手品のようなものだというのである。田中は、鬼面人を嚇すような、あるいは商業主義やポピュリズムにつながるような作品を否定する。そして、その代わり藝術には「誠意」と

² 同上、6頁。

³ 同上。

「真面目さ」が必要だと言うのである。

「技巧」に対して「誠意」や「真面目さ」を持ち出すのは、ありふれた精神論だと言えなくもないが、田中はこれをさらに具体的かつ臨床的に説明することで、単なる精神論を脱却する⁴。

藝術と云ふものは、それによらなければ、それによつて自己を生しきらねば居られなくなつて、苦しみなやみぬいた後に、生れたものでなければなりません。(中略) 書くまいと思つても、どうしても書かずには居られなくなつて、自己をそのままぶちまけた時、はじめてほんとのものが生れるのであります。要するに、藝術は手品じやありません。生む事なのです。クリエイションなのです。生みの苦しみを経て、はじめて此の世に生を得た、一箇の尊い命なのであります。人間の子供と少しも變りないのであります。故に眞面目にその悩みを受け得る人でなければ眞の藝術を生む事は出来ません。

ここでは、生きることと生むこと、苦しみ悩みぬくことという人間の存在の通底するものとして芸術をとらえたうえで、「自己をそのままぶちまけた時」にそれが可能になると言う。ここに、田中が求める芸術とは、単なる学習によって修得可能な知性を超えた、人間の本質を捉え表そうと果敢に問い続ける「愛のある知性」によって創造されるべきものであるという痛切なる思いを窺い知ることができるであろう。

田中はまた、M氏という作家をとりあげ、評価している。その評価の仕方は、「どんな小さな事にもあゝと感じ得る人です。つまらないものを見て、一大事のやうに感じて居ります」⁵というものであった。田中にとって真面目さとはつまり感受性であり、日常に対する飽くなき観察と、それを自分事としてとらえる心持ちこそが、人をして感動せしめると言うのであろう。その要点は一貫して具体的であり臨床的である。

田中はさらに「藝術は燃ゆる火であらねばならぬ」⁶と言う。この主張自体も、ありふれたものと言えなくもないが、興味深いのはここから独創性という問題に考察を進めていることである⁷。

他人のもやした焰のもえのこりをもつて来て、外の二三人の灰とごつちやにし、『これが私の焰のあとです。』なぞと云ふ人がありはしないかと云ふ事です。或はそれは一寸よく見えるかも知れません。けれどけつしてしつくりと人の胸に來ません。そ

⁴ 同上、7頁。

⁵ 同上、8頁。

⁶ 同上。

⁷ 同上、8～9頁。

それは混合物であつて化合物でないからであります。獨創でないからであります。もちろん人から焰をわけてもらつてもいゝ、ただその焰に自分の薪を加へて、もつと熾烈な、もつと大きな、もつと色の鮮明なものとなればいゝのであります。(中略)それは一つのクリエイションなのです。生みの苦しみと同様のなやみを経て來た、一つの尊い創造なのです。ですから、たとへばそれが小さな焰であつたにしてもそれは小さいながらも人の胸にひびきます。これが藝術の眞髓ではないでせうか？

言うまでもなく、この主張は先の苦しみや悩みと関連している。田中は他人とのつながりを決して否定しない。それどころか、それらを単に寄せ集めるのではなく、継承しながら自己と融合させることが重要であると言っている。他人(他者)とつながりながら、なおかつ自分の誠意を恥じずに表現することの尊さ、それを見出す田中の考察にもまた「愛のある知性」を感じ取ることができるであろう。

それでは、これらの芸術の目指すところは何か。田中の論考はそこにまで及んでいる。一言で言うと、それは「女性の解放」である。ただし、ここにもまた決して単純ではない、切実さと覚悟に満ちた考察と主張を展開しながら、クライマックスを迎えるのである⁸。

W氏、O氏輩の家庭小説に、ぼろ／＼涙をこぼしてるやうじや、いくら女子の解放を叫んだ所ではじまりません。先づ第一に、自分で自分を解放したらどうでせう。いくら解放せよ、解放せよと叫んだ所で、自分で立たうとしなければだめです。(中略)力の低いものは、己より力のまさつたものゝ前にはひざまづかねばなりません。ですから、といってもらつたのでは、又同時に結びつける事になると思ひます。けれど幸にも私共には解放してくれ得るものはありません。あるとすれば、それは神だけです。男性と云へども、私共女性を解放する事は出来ません。(中略)私共は、自分で自分をむすびつけた繩をたちきらねばなりません。私共には力がいます。もつとときはなす爲に力が入用です。先づ頭を養つて力をつけなければなりません。(中略)私共にうけ入れる力がありさへすれば、美しいもの、よきものを見せてくれる作家は、ずゑ分多く居るのです。

W氏、O氏の作品がいかなるものであるのかは知る由もないが、田中の結論をまとめるとこうなるであろう。即ち、安易な感動や感傷に浸るのではなく、自分と向き合い力をつけることでのみ、眞の自立が可能となる。そして、そのためには「頭(=知性)」を養うことが必要であり、眞の芸術はそれに資するものである、ということである。田中がこ

⁸ 同上、11～12頁。

の論考で指摘することは、まさに「愛のある知性」であると言えると同時に、このような思想を持つに至った田中自身が「愛のある知性」を体現していると言えるのではないだろうか。

3. 青銀「斷想」

大部な論説の後には、文苑というカテゴリーで小品集を収載しているが、第1号のなかでは青銀（所属不明。以下、青銀）による「斷想」というエッセイをとりあげたい。短いエッセイなので、全文を引用して考察していこう⁹。

私は、一人の若い娘が、或日、薄暗い森の中を、自分の足もとをぢつと見つめながら、あつちこつち歩きながら、そつと森の中の、淋しさに云つたのを聞いた。

娘は、こんなことを云つて居た

『私は、自分の心に、誰をも觸れさせたくない、そして若し、出来るなら、柔い緑の草の上に、そつとして置いて、ただ、あの暖かい感じのする太陽の光の中で、育んで行きたい、そしたら、自分の心にみにくい事や、厭な事を見せなくともすむから、そして又恐い事を考へて震へなくてもいゝし、悲しい苦しい秘密をもたなくてすむから、私は、秘密をもつものの、大きな喜びと、その後どうしても負はねばならない烈しい苦痛と涙を知っているから。

私はどうしても、さう思はずには居られない、そして心と云ふものは、そんなに易く誰にでも彼にでも見せることの出来るものではないやうだ、言葉のつぎ目とか、話しの、とぎれとかに、ついと口から出る、相手の言葉にまかせて、自分の心を残りなくいゝえ、一寸でも、開けるものではないと思はれるどうかして、私の心が、いつまでも、子供の頭に始終、動いてゐる、美しい想像の力を、今までにその子供が、覺えた、歌の曲の中に、何の技巧をもこらさずに、歌ひ現はすやうな心でほしい。』私は、ほゝえみながら、聞いて居たが、やがて、眞劍になつてその娘の唇をみつめて居た。

場面設定としては、青銀が森のなかで出会った——というより見かけた——1人の少女が発した独り言を聞いた、ということのようである。が、これほど長い独り言を、他人にこれほど明瞭に聴き取れるほどしっかりと発する少女がいるとも、また青銀がそれを記憶しているとも考えられない——あるいは何かに記録した様子もない——ので、作品の大部分を占めるこの“独り言”は青銀の心情を表したものと考えるのが妥当だろう。

そのうえで、発されている言葉の内容であるが、冒頭では「自分の心に、誰をも觸れさせたくない」と、心を閉ざそうとしている。一見すると、青銀は他者との関わりを遮断し

⁹ 同上、26～27頁。

ようとしているようでもある。

しかしながら、そこには他者との関係を真摯に問い続ける苦悩がある。まず「自分の心にみにくい事」を認識する知性を持つ。そして、秘密についても興味深い見解を示している。即ち、秘密を持つことに対して「大きな喜びと、その後どうしても負はねばならない烈しい苦痛と涙」があるというのである。他者と関わるがゆえに秘密が生まれ、それが喜びと苦痛をもたらす。これは他者を軽んじている限りは持ちようのない感覚であり、他者に対して誠実であろうと努めた結果を表していると言えるのではないか。

また、「心と云ふものは、そんなに易く誰にでも彼にでも見せることの出来るものではない」という言葉も、そのあとに続く「どうかして、私の心が、(中略)何の技巧をもちこらさずに、歌ひ現はすやうな心でほしい」という願いに表されるように、決して諦めやニヒリズムから来るものではなく、他者との関わりを求めつつその限界を知る真摯な態度によるものである。だからこそ、青銀は「眞剣になつて」いたのである。

こうした自己理解・人間理解と他者への誠実な態度もまた、「愛のある知性」が表されたものであると考えられる。

4. 増子わくり「ベツレヘムの星」

次に、第2号の論説を見ていきたい。聖書専攻科2年生の増子わくり(以下、増子)による論考である。タイトルの意味については今さら説明するまでもあるまい。いかにも敬虔な信者であることを窺わせるこのタイトルがなぜつけられたかは、冒頭において増子自身が自らの体験を回想する形で語っているので、まずはそこから始めよう¹⁰。

「神我を愛し給ふ」……七年前の昔忽にしの絲に導かれて西より南より東より北より赤い煉瓦造りの學校を指して集つて來た我等はバイブルの一文字さへわきまへず、もとより我等の上に絶えざる神の恵いやまし加へられつゝある事をば知るによしもなかつた。夢の間に一日一日の歩みは過ぎ行き、遂に今日に至つた今七年間の恵まれし過去の日をかへり見て、無量の感慨に打たれるのである。

増子は宮城女學校で7年間過ごしたようだが、入学時にはキリスト教についてほぼ全く知らなかったことがわかる。であれば、宮城女學校との出会いはまさに増子の運命を変えるものだったと言っても過言ではあるまい。そして、ついには聖書専攻科にまで進むこととなったほどの、その7年間のキリスト教からの学びを次のように総括する¹¹。

¹⁰ 『橄欖』2 (1922年4月)、11頁。

¹¹ 同上、11～12頁。

七年後の今静かに去りし日のあとをたどる時、只感謝と歡びに充たさる。すでに之等の長き日の間に自分達の心々にはとう／＼美しい尊い或る物がしつかと植ゑつけられてしまった。愛する事を知った、人をねぎろうことを知った、敗者の友たるべき事を知った、造り主の愛と、造られし者の罪を知った、人間の使命を知った、幼き者の魂の尊さを知った、而して慘ましき十字架上よりさして來る恵みの光りを始めて受けることが出来る様になった。」¹² それ等のすべてが尊くなくて何であらう。罪深き我が身をさへ神はかく愛し給ふのである。

神による愛、人間としての愛、それらを知ったと直截に語る増子が宮城女学校から得たものは、いかなる形であれ、「愛のある知性」と呼ぶにふさわしい。とはいえ、それがどのようなものであったのか、以下にはより個別具体的な姿を見て行きたい。

増子はまず、愛するとはどういうことかをおぼろげながら知ることができたと言い、以下のように語る¹³。

温き天父のみふところより此の現世に下り給ふた主は先づ第一に愛を完成せんが爲めに多くの友より、多くの人々より責められ給ふた。主が天父を愛し給へば愛し給ふ程ます／＼呪の聲は大きかつた。それは愛の實行は却つて人々の反抗を招いたからである。(中略) 愛することは苦痛である。愛することは大いなる苦しみの犠牲でなければならぬ。神を愛することは、主を愛することは同胞を愛することである。十字架をつけよと罵り叫ぶ敵をも赦すことである。

増子は第一に、敵をも愛し、責めに耐え忍び、赦すことに愛を見る。そして、そのような理解を遠い過去の出来事のみで終わらせていないことも、特筆すべきである¹⁴。

有名なる K 氏の働きは凡人には出来ない。人間の怖ろしい裏面をのみ見せつけられて尚ほあれまでに命を捧げて貧しさのどん底に落とされた人々の爲めにやゝもすれば猛りやすい荒んでる人々のために働いて居らるゝことは眞に愛なくしては一日も出来ないことである。愛の力はこゝにある。のゝしられても苦しめられてもなほ信ずる所を眞つ直ぐに行なつて行かれる K 氏、幾度欺かれてもより深い信仰と愛とを以て彼等のために命を犠牲にてしいらつしやることに對して感ぜぬ人があらうか。まこと愛は理屈ではない。我等凡人は體驗なしに之を知る事は出来ない。友よ、愛の尊さ、偉大さ、深さを知れ。

¹² 」は原文まま。

¹³ 同上、12～13頁。

¹⁴ 同上、13頁。

ところで、このK氏というのは、後述するように増子が『出家とその弟子』を取り上げていることから、倉田百三のことを指すものと推定される。倉田百三は幼少時から親鸞に傾倒しながらも、青年期にはキリスト教の影響も受けていたことで知られる。こうした宗教活動家を現実世界に見出し、理念として学んだ愛をそこに当てはめ、敬愛し、さらには自己を顧みようとする態度は、その教えをいかに自分のものになっているかを如実に示すものであろう。

K氏に言及する部分はまだ1ヵ所あり、そこでは増子の理解する愛についての別の側面が論じられている¹⁵。

主によりて示された愛のために我等は漸くにして再び弱者の友たるべきを知つたのである。主はいつも貧しき者、病める者、よわき者、無智なる者、罪深き者の友で在したことはバイブルの明らかに示す所である。

ここで増子は、イエスやキリスト教がいわゆる社会的弱者を救うことを使命としていることを聖書から学ぶ。そして、この点についてイエスの事績を紹介しながら論じたあと、以下のように続ける¹⁶。

K氏が此世の中に底の底まで行けば決して悪人といふ者が居ないものである、と云ふて居らるゝが實にうなづかれることである。あの想像もつかない程暗い貧民窟の生活の中にさへ彼は人の心の尊さを感じて居らるゝのである。(中略)「出家と其弟子」に表はれて居る人々の心でも、シユクスピアの作に出て来るどんな人々の心でも善である如く其他如何なる作者によつて表はされて居る人々の心でも美しくある如く、何づれの人の心にも神秘に近い尊さのあることを知り、それを自分も成長させ、又人にも助けを與ふることが特に我等に大切なことである。こゝから本當の意味の人格尊重といふものも生まれて来るものである様に思はれる。我等あくまで弱き者の友たらんことを切望し祈るべきである。

どのような人間であれ善なる心を持っているという信念に基づいて生きるK氏に学び、その神髄に到達するために自身が何をすべきか、ということにおいて、ただならぬ覚悟が語られているのである。この精神にもやはり、自らの信念に向かって問い続け、自己と他者を尊重しながら共生を追い求める「愛のある知性」が表されていることは疑いない。

以上、聖書と現実を往復しながら自らの愛に対する理解を深め、これを会得しようとする

¹⁵ 同上、14頁。

¹⁶ 同上、15～16頁。

る増子に、宮城女学校でこそ学び得た「愛のある知性」を見ることができよう。

5. 栗村道「小さい私の十字架」

次に、第2号の文苑に寄稿されたエッセイを見ていきたい。高等女学科4年生の栗村道（以下、栗村）は、ひょんなことから盗難事件の犯人とされてしまうのである。以下、その顛末をかいつまんで記述しよう。

試験前のある冬の日、髪を洗うことで100点が取れるというクラスメートの他愛もない雑談をよりどころに、洗髪に行った栗村が、洗い終わって髪を拭いていると、Mさんのお金がなくなったと叫んだ。探しても見つからず、その夜に先生も交えた会合があり、そこで栗村が事件当時その場所にいたことを明言すると、栗村1人だけが洗面所にいたことになってしまった。あらぬ疑いをかけられた栗村は、3日間食事も喉を通らない思いで、試験どころではなくなってしまった。クラスで事件のことを話すと、同情や理解を得ることができたが、疑いが晴れないので、先生の部屋に駆け込んだ。先生は同情してくれたが、クラスで話題になるたびに悲しくなり、とうとう倒れそうになった¹⁷。

事件に関する回想はここまでで、その後どのように解決したのかは記されていない。しかし、注目したいのは、この事件を振り返ったときの栗村の述懐である。以下、全文を引用しよう¹⁸。

暫くして元の自分にかへつた時この問題を再び考へた私が嫌疑の候補者になつた原因……そしてその戦況は極めて不安定な位置を占めて居つた事……して結果はどうなるだらう。私はこの問題の前に軽視されその上物質上の豊かでないので尙更深くこの破目に落ち入つた事を悲しく思ふ。けれど又一方に於て疑ひ得られる人間であるといふ事を思つた時に自分が如何に缺點の多いかを思つた。そしてこれが一つの尊い賜であると信じこの問題に對して誰をも憎むまい。

けれど自分に取つてはあまりに重すぎる荷だつた私はこの重荷の前に恐れ戰いた。けれど是が或意味に於ける十字架ではないだらうか。

私はキリストのあの十字架をおもひ祈りながら聖進しやう。そしてこの問題の前にも……………

些細なゲン担ぎがもたらした思いもよらない不運。考えようによっては、自暴自棄になり、人間不信に陥つてもおかしくないほどのこの苦難にあつて、最終的に栗村は、人を憎むどころか、自分を振り返り、相手の立場に立つて考え、理解し赦すことで、これを乗り

¹⁷ 同上、27～29頁。

¹⁸ 同上、29頁。

越えた。奇しくも前節の増子の示した愛を、栗村は実践したということになる。このエピソードもまた、宮城女学校の生徒が育んだ「愛のある知性」の1つとして、我々の記憶にとどめておくべきものであろう。

6. TW「小さな反逆者のノートから」

最後に、第3号に寄稿されたエッセイを取り上げる。その尖ったタイトルからも想像できるように、この作品は厭世的な言辞に満ちているが、しかし著者なりの鋭い眼差しを見出すことができるものである。まずは冒頭の一文を見てみよう¹⁹。

私は幸福さうに歌って居る若い雲雀さん達に前からこう云ひたかつた、「眞の瞳を開いて私共の目の前に擴がつて居る不思議な世界を御覽なさい」と。

幸福はまやかしだと言わんばかりに「眞の瞳を開く」ことを勧める TW は、一見、大衆を諭す超越者を気取っている風である。だが、少し読み進めると、必ずしもそうではないことがわかる²⁰。

何と云つても若い者達が輝かしい理想に酔ひながら人世の旅に一步踏み出すが最後、餘りにも怖ろしい裏面を見せつけられ淨い魂を踏みにぢられた瞬間程痛々しい事はない。学校では決して眞實の目を開いてくれ様とはしない、そして又社會は初心な若い者に接するのに厚い假面を以つてして居る。

利口な、美しい、立派な、体さいの良い表皮で厚く内側の只一つの醜い欲望を包み蔭して居ながら自動車に乗つて人々の間を駆け廻りながら平等だの、愛だのつて説き廻つて居る人々よ、何と都合好く人間は出来て居る。

若い人の多くはただ一步で悲哀のどん庭へ落ち込み或は呪と恨みに自分の身も心も焼盡して仕舞ふのだ。

冒頭の「雲雀さん達」とはさしずめ生徒たちのことであろうが、彼女らに対して、思い描く理想が現実とは程遠いこと、それを理解しておかないとショックを受けてしまうだろうことを警告したものであると考えられる。TW が何を経験したのかは知る由もないが、自分が思い知らされた醜い現実を友と共有したい、というところだろうか。

しかし、TW はそこでただ長い物には巻かれよと「現実」にうまく対応することを提言しているわけではない。現実の欺瞞を暴き出しつつも、眞の幸福への道筋を考えることを

¹⁹ 『橄欖』3 (1923年6月)、24頁。

²⁰ 同上。

忘れていない²¹。

眞の幸福を！と宣傳する前にお互に假面をはぎ取るがいゝ。人道を人々の前に説く前に自分の心を振り返つて見るがいゝ、其の人達は人道を教へやうとして矢張り假面の作り方を教へて居るも同様だ此の世で人々が、昔のエデンの園のアダムとエバの様に赤裸々の人間とならぬ限り眞の幸福は見出されるものではない。

(中略)

成程、或る程度まで地位や黄金は非常に價值がある事もある。而しそんな物を頼らねばならない人々を世間では何とも思はない、(中略)それ等を見ると私は却つて此の世間の隅つこで誰にも知られずに此の大きな人世の苦痛と戦ひながら涙の代りに微笑して死んで行く小さな人間に、親しさを感じ又人間味を感ずる。

こうした主張はやや抽象的であり、それだけに自称「反逆者」としてはありきたりな感が否めないが、宮城女学校で学んだであろうキリスト教の知識や精神が発露されていることは間違いない。なお、これ以外にも TW は、「多くの人自分よりも弱い者に對して常に暴君である。」²²と喝破し、「誰が幸福であり得ようか。此の地上に於て。」²³と絶望を見せながらも、最後には「而し私は只未來を信じたい、此の世に於て充たされない物が未知の彼處で見出される事を信じたい。」²⁴と希望をもって筆を擱く。

以上のような姿勢に、眞の幸福を問い続け、小さく弱い人間に共感を抱くという、「愛のある知性」を読み取ることができるだろう。

おわりに

本稿では、『橄欖』に投稿された様々な作品のなかから、「愛のある知性」を感じさせるものを選び出し、これを論評した。「文学少女」という存在が一定の憧れを集めていた大正時代²⁵であればこそ、こうした文筆活動を通じて自らの思想を表現することがある種のステータスとして求められており、それに対応した表現技法を発展させていたという側面はあるかもしれない。しかし、仮にそうであったとしても、10代後半頃と推定される生徒たちが、自己や他者に対してこれほどの考察を行い、自らの意見を述べられていたことについては、率直に驚きを禁じ得ない。そして、これは第一義的にはもちろん執筆それだけの資質によるものではあるが、随所に表出されている「神を畏れ、隣人を愛する」キ

²¹ 同上、25～26頁。

²² 同上、26頁。

²³ 同上。

²⁴ 同上。

²⁵ 時代背景については、たとえば、稲垣恭子『女学校と女学生』(中央公論新社、2007年2月)などに詳しい。

リスト教精神、文学や芸術に対する理解や情熱など——即ち「愛のある知性」——は、宮城女学校でこそ豊かに育まれ、開花したものであるということも、また十分に示されているのではないか。

なお、今回取り上げた作品はすべて『橄欖』初期のものに限られており、そういう意味では「愛のある知性」を宮城学院に通底する教育理念として確認するという目的は、十分に果たせたとは言えないかもしれない。個人的には、生徒たちの自主性に富む『橄欖』初期²⁶に対する思い入れもあり、このような選定になったが、今後機会があれば、他の時期の作品についても考察をしていきたい。

(こはだ せいじ / 宮城学院女子大学一般教育部教授)

²⁶ 『橄欖』初期の特異な性質については、小羽田誠治「『橄欖』成立の歴史とそこに見る生徒の「自主」」(『宮城学院資料室年報』27、2022年3月)を参照されたい。